

陸の水

==== No.75 ====

日本陸水学会東海支部会
ニュースレター（2017年6月8日）
発行：日本陸水学会東海支部会
連絡先：〒432-8561 静岡県浜松市
中区城北 3-5-1 静岡大学 工学部
戸田 三津夫
Tel:053-478-1146、Fax:053-478-1183
E-mail: toda.mitsuo@shizuoka.ac.jp

目次

- 第30回談話会の案内 (p.1~2)
- 2016年度「第19回研究発表会」の報告 (p.2~4)
- 第29回談話会の報告 (p.5~6)
- 2016年度「第20回総会」の報告 (p.7~10)
- お知らせ 会費納入のお願い (p.11~12)
- 東海支部会のHPがリニューアルしました！ (p.12)
- 会長、幹事退任のあいさつ、新会長、幹事就任のあいさつ (p.13~15)
- 編集後記 (p.17)

第30回談話会の案内

開催日：2017年6月23日（金） 18：30～20：30
場所：愛知工業大学本山キャンパス 2階 多目的室
<http://www.ait.ac.jp/access/motoyama/>

講師：末吉正尚先生（土木研究所自然共生研究センター）
演題：「変動する環境下で生息場の複雑さがもつ意味を考える」

要旨：

私たちの周りのあらゆる生物相は、現在の生息環境だけでなく、氷河期からの気候変動や近年の大雨による洪水など、長短・大小さまざまな時空間スケールでの攪乱の経験によって成り立っている。攪乱は時に、種の絶滅を引き起こすほどの甚大さを有しているが、多くの生物は様々な形で攪乱から避難し、耐えて現在まで生存してきた。河川底生動物（水生昆虫）は、洪水が生じて数日から数か月ほどで洪水前の状態に回復することがごく普通にみられる。彼らの攪乱への高い回復力はこういった要因に支えられているのだろうか？本講演では、避難場（レフュジア）をキーとして、演者がこれまで行ってきた洪水時の生物分布調査から、

多様な生息場と抵抗性の関係性、生息場が人為的な影響によって変化したときの生態系の脆弱化に関して紹介する。

※本談話会は、土木学会継続教育（CPD）制度のプログラム（2.0単位）に認定される予定です。皆様ふるってご参加ください。

支部会サイト：<http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/東海陸水談話会/>

2016年度「第19回研究発表会」の報告

後悔を乗り越えて～日本陸水学会東海支部会第19回研究発表会
野崎健太郎（椋山女学園大学教育学部）

この小文は、東海支部会の研究発表会をめぐる後悔の告白と再生への決意です。発表件数35題、第19回研究発表会は、ここ5年間では最大規模の開催となりました。近年の発表件数は、25題（第15回2013年）、29題（第16回2014年）、26題（第17回2015年）、17題（第18回2016年）と30題を超えることはなく、今回の盛況さが際立ちます。手元に残る最も古い講演要旨、第7回研究発表会（2005年）では、発表件数わずか15題、4時間で終了しています。宿舎の昼神温泉でゆったりと湯につかり、発表を気にせずに懇親会を存分に楽しんだことが記憶に残ります。

そして東海支部会は、この小規模であった時代の家庭的（家族的）な雰囲気の色濃く残り今に至っています。例えば、一日目の夕食後に参加者総出で行われる懇親会（二次会）では、老いも若きもが入り混じりながら意見交換を愉しみます（写真1）。二日目の午後には、開催地近辺の陸水環境の巡検を通じ、ここでも会員相互の素面での懇親が深まります（写真2）。個人的には、これからも大切に維持していきたい良い雰囲気です。

しかしながら、35題53人の参加者となった今年は、参加者の中心であった若い学生さんたちに3つの大きな迷惑をかけてしまいました。1つ目は、懇親会（二次会）を幹事部屋ではなく学生部屋で行ったことで、翌日に発表を控えた学生さんの安眠を阻害したこと、2つ目は、大人（社会人）たちが散々飲み食いした挙句、懇親会の後片付けを放棄し帰ってしまったこと、3つ目は、特に二日目ですが、発表時間の大幅な超過によって、終了時間が1時間近く伸びてしまったことです。これらは、今後、支部会に入会し活躍してくれるはずであった学生さんたちに大きな失望と嫌悪感を与えてしまいました。痛恨の思いです。率直に学生さんたちの意見を伝えて下さったある先生には本当に感謝しております。

ただ悪いことばかりではありません。私の研究室からは3名の学生が参加しました。その内、2名は、アレルギー食、そして戦争という陸水学とは直接的な関わりは無い研究を発表させて頂きました。そんな2人を東海支部会は暖かな雰囲気で包んでくれました（写真3）。参加する前は、私を怒らせないための人身御供（指導学生は10名います）の気分であった2人ですが、大学に戻り、ゼミノートに書いた言葉は以下の通りです。付け足しはありません。

「学会バリ楽しかったです。とにかく自分とは全く違う世界で真剣に研究されている方々の一部分に触れて、また新しく価値観が広がったように思います。どんな世界にもプロがいるんだなあ……。そう思うと謙虚な気持ちになるし、自分はどの専門でがんばろう？ やっぱり歴史だなあ、となりました。私もこんな温かくて気持ちのいい学会をみつきたいものです。陸水バンザイ。(清水菜月氏，現在 愛知県小学校教諭)」

「学会おつかれさまでした。発表終わるまでは、超超緊張したけど、終わって質問やアドバイスを頂けて、学校の発表とはまた1ランク上の発表だった気がしています。嬉しかったのは、それまで手を挙げていなかった方がコメントしてくれたことと、デコレーションというのはとっても良いですね！と言われたことです。何だか自分の研究が認められたみたいで、とっても嬉しかったです。夜の飲み会は本当に楽しかった！！ずっとイカ食べてた。先生方の話がおもしろくて聞き入っちゃいました。1番心に残ったことは、ファービーこと谷口先生に言われた、『知らないことを知るのってすごく楽しいでしょ？それが研究で全然苦じゃない』という言葉です。先生になったら、知らないことを知る楽しさを子どもたちに伝えたいな、と思いました。(嫌々)行くことになった学会でしたが、本当にたのしかったです！！！！！！！！いろいろな方の研究を知るとは、新鮮で自分の知識が増えた(気がする)。陸水の人たちは、本当にいい人たちばかりで、あたたかかったです。(大日方理紗氏，現在 名古屋市小学校教諭)」



写真 1. 懇親会（二次会）での集合写真（2017年2月11日，湯の山ロッジ）



写真 2. 巡検の様子（2017年2月12日，三滝川の伏流水が湧き出る池）



写真 3. 集合写真（2017年2月12日，湯の山ロッジ）

第 29 回 東海陸水談話会の報告

日時 平成28年12月7日（水） 18時30分~20時00分

椋山女学院大学 星ヶ丘キャンパス教育学部棟理科室A301

話題提供

「礫河川の中小洪水時の流れと土砂移動に関する現地計測の試み」

椿 涼太（名古屋大学大学院）

「東海地方における湧水湿地の分布とインベントリ作成の試み

富田啓介（愛知学院大学）

【演者による抄録】

—礫河川の中小洪水時の流れと土砂移動に関する現地計測の試み—

名古屋大学大学院 椿 涼太

12月7日に、椋山女学院大学星ヶ丘キャンパスにおいて開催された、第29回東海陸水談話会で話題提供をさせていただきました。その内容は、川の中で石がどのように動いていくか、ということを実際の川で洪水中に実測しようというものです。川といっても、いろいろありますが、ここでは、人頭大の礫があるような川を対象としています。このような礫は、ある程度、急な勾配の河川において、水流と重力により山地から運ばれて河道内に堆積しています。そのような川では、より小さな砂や小礫も、洪水中にはたくさん流れています。ただ、これらの小さな砂や礫は洪水が終わったあとの河床を眺めても、それほど目立ちません。このこともあり、大きな礫で構成された河川において、洪水中に移動する小さな砂や礫の移動量や、どのように移動していくかは、出水前後の調査では把握することが難しく、出水が起きている最中に直接測る意義があります。一方で、急な勾配の河川であるため、洪水中は流れが速く、大きな流木や小さいが多量の落ち葉なども流れてくるため、河床付近で起こっている現象を把握する方法には大きな制約が生じます。

本研究では、基本的には川底に元からある、大礫と同じようなサイズ・形状の外形を持った機器を用いました。洪水により流されてきた小礫が、その機器に衝突した際に発する音、および機器に埋め込んだ水圧センサーによる圧力変動を記録して、その事後分析によって、洪水中に移動する砂や小礫の移動量やどのように移動していくかについて検討しました。

衝突音も圧力変動も、間接的に砂の移動を把握する方法であり、検出限界などの制約もありますが、計測結果からは、大礫の河床の上を、砂や小礫が波のように組織的な形状を持って、移動していることが示唆されました。砂が波のように移動することは、海岸や河川の下流部ではよく見られる現象ですが、急勾配の礫河川でも、そのような組織的な動き方をすることはあまり認識されておられません。そのような組織性を考慮することで、大礫の上を通過する、砂や小礫の移動量を数値計算で見積もる精度を上げることができるはずです。また、河床を住み処とする動物や植物に対する洪水のインパクトを考える上でも、砂や小礫がどのように通過していくかは重要な観点となります。さらに、ダムや堰に溜まった砂などを、下流に流していく取り組みも行われるようになってきていますが、そのよ

うな取り組みを行うことの影響を分析する上でも、本研究成果や計測技術自体が役立つのではないかと考えています。

ここで紹介した内容は、広島県と島根県の県境の河川をフィールドとして調査したものです。東海地区での礫河川での土砂移動について面白いフィールドやイベントをご存じでしたらぜひ教えてください。

東海地方における湧水湿地の分布とインベントリ作成の試み

愛知学院大学 富田啓介

椿先生に続き、2つ目の話題を提供いたしました。私は、地理学（主に自然地理学や地生態学）の観点から里地里山における人と自然の関わりに注目して研究を行っております。今回は、里地里山に多く見られる湿地、湧水湿地のインベントリ作成について紹介しました。

湧水湿地は、貧栄養の湧水によって形成された小規模な湿地で、泥炭の堆積がないか乏しいことが特徴です。西日本の丘陵地を中心に広く分布しており、地域固有種や希少種の棲息・生育地として知られています。東海地方にも数多くの湧水湿地が存在しましたが、近年の都市化などによって大きく数を減らしたと考えられます。残された湧水湿地の保護が重要ですが、その足かせになっているのが、「どこに、どのような湿地が、どれだけ存在しているのか」という基礎情報が整備されていないことです。

そこで、2012年に東海地方各地で自然・生物の観察を熱心に行っている市民の方々、地域の自然情報に詳しい研究者の方々が集まり、湧水湿地のインベントリ（目録）作成に取り組む「湧水湿地研究会」を立ち上げました。地域ごと担当を決め、その地区に存在する湧水湿地の情報を調べてもらうのです。調査4年目の現在、愛知・岐阜・三重・静岡・長野の各県から1,400か所あまりの湧水湿地の情報を得ており、今後も調査を続ける予定です。

調査内容は、湿地名・位置・面積・水質・社会状況・自然状況・主な生物種の在不在など多岐に渡っています。今回の話題提供では、まず現段階で明らかになっている全体の分布図を紹介し、さらに、全体を通じた水質指標（pH・EC）や関連する自然・社会状況の特色について若干の議論を行いました。一般に、湧水湿地の水質は「貧栄養・弱酸性」と言われており、今回の調査でもその傾向を確認できましたが、富栄養な湿地、アルカリ性に傾いている湿地もいくらか存在していることもわかりました。これらを例外的な存在であると片付けずに丁寧に見てゆくと、基盤となる地質を反映していたり、農地からの肥料分の流入など周囲の社会状況を反映していたりと、湧水湿地の生態的特色や置かれた社会的状況を明らかにする上で重要なことがらを反映しているようです。今後、追究を進めます。

湧水湿地インベントリの詳細な分析はこれからですが、その結果をどう社会に公表し、また、どう保全につなげていくのかについても、議論が必要になります。今回の話題提供では、こうした点についても様々な示唆をいただくことができました。研究フィールドの近くに湧水湿地がある方もいらっしゃるかもしれません。分布情報に限らず、湧水湿地に関する様々な情報を集めておりますので、何か興味深いことがありましたらぜひお聞かせください。

2016年度「第20回総会」の報告

2016年度事業実施報告

第20回となる総会が、2月11日の研究発表会1日目の終了後に開催されました。担当者から事業・会計等について説明があり、審議・承認されました。

・事業実施報告

2016年度事業実施報告

昨年度の第19回総会において承認された事業内容（「当初計画」）と今年度の事業実施状況を次の表にて報告し承認されました。

活動項目	当初計画	実施状況
ニューズレター発行	年間3号	2016年4月（No.72）、11月（No.73）に発行。 2017年3月にNo.75を発行予定。 電子版でも配信。No.74は論文集
論文集発行	年間1号	陸の水論文集2016（陸の水 No.74）を12月に発行
サマースクール	夏1回実施	2016年8月27日、28日に瀬戸市にある東京大学生態水文学研究所赤津研究で実施。 ※陸の水 No. 73 に報告記事掲載
談話会	年2回実施	■第29回談話会 12/7（水） 18：30～20：00 場所：椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス 椿涼太（名古屋大）：礫河川の中小洪水時の流れと土砂移動に関する現地計測の試み 富田啓介先生（愛知学院大）：東海地方における湧水湿地の分布とインベントリ作成の試み ※土木学会継続教育（CPD）制度のプログラム（1.5単位）として実施
見学会	年1回実施	■研究発表大会終了後に予定
助成金	15万以内で5件まで助成	高校生の2グループからの応募。厳正な審査の結果、今回は調査・研究の助成の該当なしと決定。 ※2017年度の審査方法および時期について検討。
広報・学会公式HP		http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/ に開設。活動状況・予定など随時更新中。 Facebook（仮）による広報。
総会・研究発表会	2月に実施	2017年2月11,12日に実施（三重県四日市市・菰野町）。
教科書販売：	『身近な水の環境科学-測定実習編』	1冊定価2,700円（税別）を2,500円で販売。
学生奨励賞の授与		学生発表賞の授与。
幹事会の開催		幹事会の会合：3回、メール会議：適宜

2017 年度事業計画

1. 論文集 (No. 77) の発行
2. ニュースレター「陸の水」の発行：年間 3 号
7月 (No. 76)、12月 (No. 78)、3月 (No. 79)
3. サマースクールの開催 (8月)
4. 談話会の開催：年間2回 (時期未定)
※土木学会継続教育 (CPD) 制度のプログラム (1.5単位) として実施予定
5. 見学会の開催：年間1回 (時期未定)
6. 総会・研究発表会の開催
7. 一般研究助成 (基本的に助成金10万円以内。助成金申請は5万円まで)
8. 学生奨励賞の授与 (学生発表賞)
9. 活動報告 (HPの更新、ML・Facebook、研究発表会の要旨の公開)
10. 「陸の水」論文集・教科書販売：論文集は2000円、教科書『身近な水の環境科学-測定実習編』は1冊定価2,700円 (税別) を2,500円
11. 社会貢献 (2015年からの継続として環境影響調査を実施)
12. 他学会・他の研究会との交流および共催・協力行事の実施
13. 幹事会の開催

日本陸水学会東海支部会規約および細則・投稿規程の改正 (案)

1. 日本陸水学会東海支部会細則の変更

【現行】

1. 日本陸水学会東海支部の会計年度は、総会から次期総会までとする。
2. 日本陸水学会東海支部会の年会費は、団体4000円、家族3000円、一般2000円、学生 (大学生以上)1000円、高校生以下は無料とする。
3. 会費を2年にわたり滞納した者は退会とみなす。
附則 この規約は2006年3月11日から実施する。

【修正案】

1. 日本陸水学会東海支部の所在地は「三重県四日市市萱生町1200四日市大学内」とする。
2. 日本陸水学会東海支部の会計年度は、1月1日から12月31日までとする。
3. 規約第2条による日本陸水学会東海支部会の会員の種別は団体会員、家族会員、一般会員、学生会員 (大学生以上)、ジュニア会員 (高校生以下) とする。それぞれの年会費は、団体4000円、家族3000円、一般2000円、学生 (大学生以上) 1000円、高校生以下は無料とする。
4. 会費を2年にわたり滞納した者は退会とみなす。

2. 陸の水論文集の投稿規程の改定

投稿規程1.

投稿者単著論文の著者は、日本陸水学会東海支部の一般会員・家族会員および学生会員に限る。共著論文の場合、一般会員が1名以上含まれていれば、筆頭著者が支部会員である必要はない。尚、筆頭者としては1本、共著者としては2本までの投稿に限る。具体的には最大2論文まで、著者として名を連ねることが出来る。但し、幹事会が認めた場合はその限りではない。資料については、投稿数は制限しない。

投稿規程9.

別刷り代金は、全て著者が負担する。初校時に別刷り注文表を送付するので、それに必要部数、送付先、支払い方法を記入して編集委員長に返送すること。論文PDFファイルは、陸の水論文集別刷り料金に関する内規のPDFファイル料金により販売する。

2017年度 次期役員

新執行部について

会長：井上祥一郎（株式会社名邦テクノ）
副会長：内田臣一（愛知工業大学）
庶務担当幹事：須田ひろ実（株式会社ニック環境システム）
陸の水担当幹事：末吉正尚（土木研究所自然共生研究センター）
社会貢献担当幹事：松本嘉孝（豊田工業高等専門学校）
会計監査：新実智嗣（株式会社水地盤研究所）

幹事(留任):

吉成 暁（いであ株式会社 環境創造研究所：広報HP担当）
大八木麻希（四日市大学：会計）
野崎健太郎（椙山女学園大学：陸の水論文集編集委員長）
田代喬（名古屋大学：事業 担当）
戸田三津夫（静岡大学：一般研究助成）
新実智嗣（株式会社水地盤研究所：事業補助）

退任：

谷口智雅（三重大学：会長）
宮川幸雄（土木研究所自然共生研究センター：庶務 担当）
中村早耶香（中部大学：会計監査）

予算決算書

2016年度の収支の状況を以下の通り、ご報告いたします。

2016年度予算決算書 (2016.01.01～2016.12.31)

[収入]

費目	2016年度予算	2016年度決算	備考
前年度繰り越し金	494,514	494,514	
会費収入	171,000 75,000	78,000 32,000	団体1、一般36、家族1、学生3(次年度前納者含む) 学生3、一般13
雑収入	150,000	116,306	論文集別刷代41600円、書籍印税74706円
寄付金	0	0	
利息	10	24	
総計	890,524	720,844	繰り越し494514円+収入226330円

[支出]

費目	2016年度予算	2016年度決算	備考
郵送料	15,000	714	庶務・会計に係る通信費
ニューズレター発行費	35,000	9,201	陸の水の送料、封筒・切手代など
要旨印刷費	15,000	12,452	第17回研究発表会要旨集製本謝金
事業費	400,000	69,945	総会等補助(見学補助、大会文具類、講師謝礼)
論文集発行費	400,000	479,972	論文集印刷代、送料
雑費	10,000	1,944	振込み手数料など
予備費	15,524	21,680	幹事交通費等
総計	890,524	595,908	次年度繰越金124936円

・2017年度予算については以下の通りです。

2017年度予算案 (2017.01.01～2017.12.31)

[収入]

費目	2017年度予算	備考
前年度繰り越し金	124,936	
当年度会費収入	174,000	会員89 (特別会員1, 一般会員79, 家族会員2, 学生6, 団体1) ※一般会員の中に、学生会員および家族会員を含む
過年度分会費収入	50,000	前年度の会費徴収
雑収入	409,500	論文集・教科書販売(50,000円)、別刷り代(100,000円+259500円(Vol.74))
寄付金	0	
その他	10	
総計	758,446	

[支出]

費目	2017年度予算	備考
郵送料	15,000	庶務・会計に係る通信費
ニューズレター発行費	35,000	陸の水の送料、封筒・切手代など
事業費	250,000	総会等補助、研究助成、談話会等の講師謝礼、社会貢献
広報費	25,000	インターネット、土木学会継続教育(CPD)制度プログラム
論文集発行費	400,000	論文集印刷代、送料
雑費	10,000	振込み手数料など
その他	23,446	幹事会交通費等
総計	758,446	

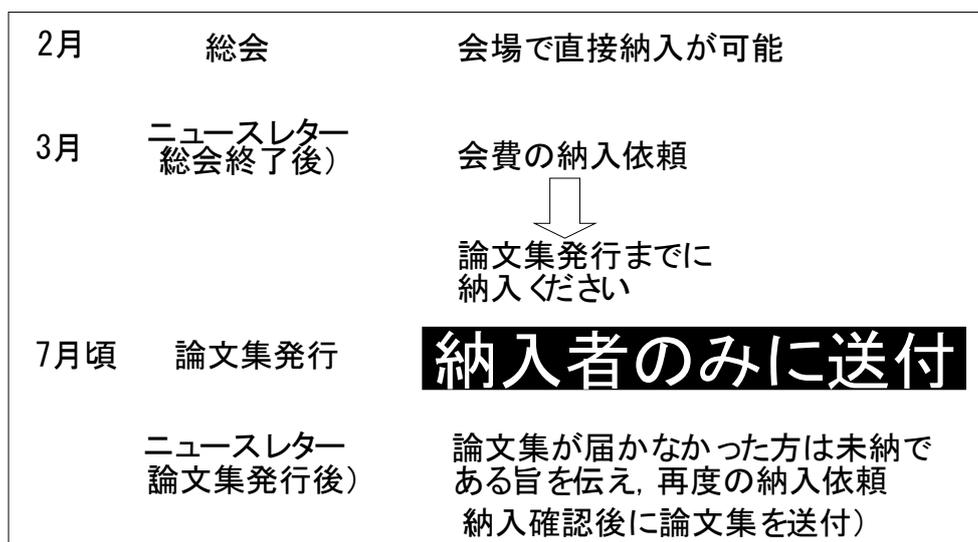
お知らせ

会費納入について

会費の納入が確認できた会員にのみ、論文集を送付することが総会で承認されています。論文集の発行が毎年7月頃に予定されておりますので、研究発表会・総会（2月）にて直接納入をされなかった会員の方は、その時期までに会費納入をお願いします。忘れてしまうことも考えられますので、早期をお願いします。

論文集発行後のニュースレターで、「論文集が届かなかった会員の方は会費が未納である」ことを伝え、再度会費の納入をお願いさせていただきます。論文集の発送までに会費納入が間に合わなかった方は、その旨事務局

（rikusui-tokai@rikusui-tokai.sakura.ne.jp、担当：吉成）までご連絡ください。論文集は、会費の納入確認後に送付されます。皆さまからの会費は支部会の運営を支えるものですので、お忘れなく納入いただきますようお願いいたします。



会費の納入方法について

納入方法として、下記「ゆうちょ銀行」への振込、もしくは談話会や研究発表会などでの直接的なお支払いも受け付けております。ゆうちょ口座から通帳かカードでATM振込をご利用いただくと手数料無料となります（ATM送金料金が無料となるサービス期間は現在も継続中）。会費納入状況が不明な場合は事務局までご照会ください。2年度分の会費が未納の方は、規約に従い、翌年度には自動的に退会となりますのでご承知おきください。その際も、未納会費2年分のお支払いをお願いしております。

年会費：一般 2,000 円、学生（大学生以上）1,000 円、高校生以下は無料、

団体 4,000 円、家族 3,000 円

振込先が変わりましたので、ご注意ください！

< ゆうちよ銀行からお振込みの場合 >

記号：12120-2 番号：73385891

名前：日本陸水学会東海支部会

< 他の金融機関からお振込みの場合 >

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：二一八（読み ニイチハチ） 店番：218

預金種目：普通預金 口座番号：7338589

カナ氏名（受取人名）：ニホンリクスイガツカイトウカイシブカイ

入会および退会の手続きについて

総会で、入退会の手続きを以下のようにルール化することが確認されました。

■ 入会手続き

- ① 当会の HP にある入会申込書に必要事項を記入
- ② 申込先は会長宛て※とする（その後、担当幹事へ情報を共有）

■ 退会手続き

- ① 退会する旨、会長宛て※に連絡（その後、担当幹事へ情報を共有）
3 月は学生の方が卒業されるので、教員の方は特にご配慮お願いします。
- ※2017 年度は、吉成（rikusui-tokai@rikusui-tokai.sakura.ne.jp）まで

東海支部会の HP がリニューアルしました！

2016 年 4 月より支部会 HP がリニューアルしましたのでお知らせいたします。
新しい URL は下の通りです。

<http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/>

支部会の情報をいち早くお届けするとともに、陸の水ニュースレターや論文集のバックナンバーなどを掲載しています。また、HP に掲載する東海地方の陸水関連の写真も募集しています。一度、立ち寄って見て下さい！

（HP 担当 吉成）

会長退任のあいさつ

2014年度から2016年度の三年間にわたり、支部会の会長を務めさせて頂きました。東海地区の三重大学に2011年4月に赴任して4年目と東海地域で陸水に関する活動経験が浅いにも関わらず、大任を仰せつかりました。この間、東海地域の陸水について分からないところも多々ありましたが、皆様のご協力を戴きながら、当会の運営をより充実・発展したものにできますよう、全力を尽くして参りました。色々と至らない所もあったかと思いますが、おかげさまで、この3月を持って無事退任することができました。

昨年9月に三重大学から中国の天津師範大学に現地滞在の教員として赴任したため、昨年度の後半は支部会主催の談話会や幹事会に出席できず、幹事の皆様をはじめ会員、ご参加頂いた方々には色々とお迷惑をお掛けしました。しかし、2月に三重県四日市市の霞ヶ浦会館、菰野町の湯の山ロッジで開催した2016年度第20回総会・第19回研究発表会には、2月末からの天津師範大学での後期授業の日程に合わせて、開催日程を調整させて頂き、無事出席することができました。半年近く支部会の運営を留守にしていたにも関わらず、皆様には温かく迎えて頂くとともに、円滑な会の運営にご協力頂いたことを感謝致します。同時に、改めて支部会の良き所を実感することができました。

現在も天津に滞在中につき、機会は限られてしましますが、多くの皆様に、談話会、研究発表会、論文集への投稿という機会を通じて、ご一緒できることを願っております。

このたび、新会長に任を引き継ぐことができたが、改めて3年間の会員各位のご厚情とご協力に、心より感謝いたします。また献身的に会の運営を担っていただきました幹事の皆様に深くお礼申し上げます。

谷口智雅（天津師範大学国際交流学院／三重大学国際交流センター，旧会長）

新会長，幹事就任のあいさつ

青天の霹靂というのは将に田代さんからの会長への就任要請の電話でした。本会会長は研究者の座る席という先入観があったから、技術屋を自認する私は、暫し仰天しました。しかし、幹事の中にも技術屋がちらほら見えるし、冥土への土産話として2年間の任期を楽しませて貰おうと承諾させて頂きました。

木だらけの10坪の小屋まで作った宍道湖での「流域環境修復実学」活動も、研究者の成果を技術の世界で生かし、漁協、漁民とも協働して結果を出すことを目的にしています。碧南の油ヶ淵でもヘドロを直接接触したし、林学出身というのも珍しそうだし、事務局はしっかりしているしと、現在は楽しみの方が先にきています。

温泉とお酒好きの会員の多いことも確認済みなので、明るく楽しい会の伝統を守っていきたくと思っています。会員の皆さん、2年間、よろしくお付き合いください。年相応に私に何かあったら、内田副会長、後をよろしく願います。また、会計幹事は特にご苦労が多いと思います。皆様、よろしくご協力頂けるよう、重ねてお願いしておきます。

井上 祥一郎（名邦テクノ 技術部，新会長）

このたび、副会長を仰せつかった内田臣一です。元の専門はカワゲラの分類で、東京都立大学理学部（一時 西ドイツ マックスプランク陸水学研究所シュリッツ河川実験所へ留学）から滋賀県立琵琶湖博物館に勤め、2000年から現在の職場で土木の学生に生態学（とその関連分野）を教えています。研究も土木事業との関連で水生昆虫全般を対象とするよう広げることになりました。日本陸水学会には入退会を繰り返しているような腰の引けた会員ですが、その東海支部会では、意欲的な活動をされていることと近くなので会合に参加しやすいことで、このところしばらく会員として楽しませていただいていた。しかし、楽しんでだけでなく、少しは東海支部会の役をせよ、との声が聞こえた（ような気がする）ので、副会長としてもっと楽しんでくださる方が増えるよう微力を尽くしたいと思います。よろしく願いいたします。

内田 臣一（愛知工業大学）

2009年から2010年の幹事から7年振りに復帰することになりました。豊田高専の松本です。以前の頃は、東海地区に着任して間もない頃もあり、東海陸水学会の人々にいろいろお世話になったことを今でも感謝しています。それ以降と言えば、陸水関係の研究だけでなく、防災対策、新技術開発、高専の国際化への対応、FDシステムの開発と広範に仕事を進めてきました。これらの経験を学会へと還元しつつ、現在進行中の御嶽研究の充実化、社会貢献への発展の道筋を考えています。また、皆さんが手を取り、一つのテーマで楽しく刺激的に研究するテーマも新たに考えたいと思いますので、どうか2年間よろしく願いいたします。

松本 嘉孝（豊田工業高等専門学校）

このたび、研究・社会貢献担当幹事としての務めを終え、新たに事業担当を拝命した、名古屋大学の田代です。これまでは、2014年9月の御嶽噴火による水環境影響を明らかにすることが任務でしたが、フィールドとした長野県王滝川水系では、直近の噴火だけでなく、1989年9月の長野県西部地震に伴う「御嶽崩れ」に加え、戦前から続く水資源開発の影響が相俟って因果関係は複雑化しており、未だ道半ばといった状況です。

今後も、趣旨にご賛同いただいた会員有志の方々との共同研究は継続して参りますので、後任の松本幹事（豊田高専）ともども、引き続き、ご理解・ご支援のほど、よろしく願いいたします。新たに拝命した事業担当としては、行事を介して他団体との連携を進め、活性化ができればと考えています。今後の支部会行事の企画に対するご要望などございましたら、お気軽にお知らせいただけましたら幸いです。

改めましてもう2年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

田代 喬（名古屋大学）

今年度より新幹事として、陸の水の編集を担当させていただくことになりました末吉正尚です。私は現在、岐阜にある土木研究所自然共生研究センターに在籍しております。その前は、北海道大学で博士課程を修了しており、以前陸の水編集を担当していた森照貴さんとほぼ同じ経歴となっております。こちらに来てすでに2年が経っておりますが、実はまだ東海支部会の行事に参加したことがありませんでした。このたび、田代さまから陸の水編集の担当を打診して頂き、これを機会に、東海支部会の皆様と交流を深めるとともに陸水学の知見を学んでいきたいと思い、僭越ながらこの役職を引き受けさせていただきました。

私の研究の始まりは、信州大学在籍時に行った千曲川での水生昆虫調査でした。水生昆虫はトンボやゲンゴロウくらいしか認識していなかった身で、体当たりで調査を始めた途端に大洪水で調査地の水生昆虫がほぼ全て流されてしまいました。それを機に、洪水攪乱という現象に興味を持ちました。北大に移ったあとも、雪深い道北の川で融雪洪水時の調査を行ってきました。現在は、生息場の異質性が持つ重要性に関して研究を続けつつ、ダムが魚類の分布や個体群維持に及ぼす影響に関する研究も行っております。このあたりの研究を2017年6月23日に行われる談話会で紹介させていただきますので、興味のある方はぜひご参加ください。また機会があれば、陸の水ニュースレターで研究紹介などを行っていききたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

末吉 正尚（土木研究所 自然共生研究センター）

今年度より幹事となりました須田ひろ実です。自然環境調査に携わる傍ら、細々と湖の動植物プランクトンの調査をしています。肉眼では見えないほどの微小な存在にも関わらず巧みな生存戦略を持つ彼らに驚かされ、秘められた強かさを感じるとともに、その世界の奥深さに自分の勉強不足を実感する日々です。

東海支部会には学生時代よりお世話になっており、先生方から温かいご指導をいただいたり、様々な専門分野の方とお話しできたりする貴重な機会に恵まれてまいりました。幹事を務めるのは初めてですので、皆様に教えていただきながら精一杯努めたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

須田ひろ実（株式会社ニック環境システム）

本号までニュースレターの編集と一般研究助成を担当させていただきました。2017年度からは、助成金担当ということで幹事留任です。この会に参加させていただくようになって、居心地がよすぎてもう何年もたってしまいました。前回の静岡開催のサマースクール、研究発表会からもずいぶんたちましたので、そろそろ「また静岡で」という声がかかって来るような気がしています。静岡県は東西がずいぶん長いですが、距離のわりには高速道路と新幹線のおかげで時間はさほどかかりません。「ここに行きたい!」というご希望がありましたら声を発していただければ実現するかもしれません。

戸田三津夫（静岡大学）

(編集後記)

浜松で5月28日に外来種と生物多様性をテーマにしたシンポジウムを開催しました。

いろいろ議論はありますが、外来種いろいろ捕っています。前から魚や虫とりは好きでしたが、昨年くらいから「昆虫食倶楽部」という“怪しげな?”団体の仲間とともに、ミシシippアカミミガメ、ウシガエル、アメリカザリガニ、セミ類、バッタ類などを「とって、食べる」イベントを開催しています。世の中の大多数は、「とらずに、食べる」ですが、ときどきは、「とって、食べる」ことも体験すべき...などと言ってやっています。結論から言って、「カメ(ミシシippアカミミガメ)」はなかなか手強いです。つかまえて、観察して、解体して、食べて、いろいろわかりましたが、まず、生き方が超省エネです。野外ではだいたいいつも腹を空かして、しばらくほとんど食べなくても結構平気です。そして、なかなかお亡くなりになりません。ほ乳類なら10分でコロリの高濃度CO₂中で1時間くらい大丈夫で、苦痛を与えない殺処分はこのCO₂法と「冷凍2日コース」くらいです。そして、甲羅のガードが固い。解体には側面のつなぎ目を左右切り放さなくてはなりません。これが大変。そして、省エネだけあって解体後にとれる筋肉量はたかだか15%程度で、とても食べるために捕ろうという動物ではありません。でも、お味は悪くはありません。脊椎動物の解剖教育が消えた(?)現在、生物の体の作りを学ぶよい解剖教材になるかもしれません。命は命、何かの役に立ってもらえればと思います。

次のターゲットは、国内外来種为天竜川のギギです。普通過ぎてがっかりしました??

では、浜名湖のアメフラシもやってみましょうか。参加したい方は連絡ください。裏磐梯へのウチダザリガニ捕獲ツアーも構想中!

(戸田 三津夫)